



## 6. 私の研究履歴 「本流」と「傍流」の葛藤から生まれるもの

杉本なおみ  
慶應義塾大学看護医療学部

### 1. はじめに

2001年、慶應義塾大学看護医療学部の開設と同時に助教授として着任した私は、コミュニケーション学の博士号のみで医療系学部の専任教員となった国内初の事例だと言われています。そこに至る経緯を尋ねられるたび、これまでは「ギョーセキではなく（慶應義塾大学病院の元小児患者という）ビョーレキによる大抜擢」と茶化してきましたが、本稿では自分の研究履歴と真摯に向き合い、常に「本流」と「傍流」の間で揺れ動いた年月を振り返ります。

### 2. 「日本のコミュニケーション学研究事始の地」に飛び込み…飛び出す

子どもの頃の長い闘病生活を周囲の顔色を窺うことで乗り切った私は、人と人の関わりに関心を抱いて国際基督教大学に入学しました。同大学は日本におけるコミュニケーション学研究事始の地であり、日米比較を中心とする研究が隆盛を極めていました。コミュニケーション読書会サークルに属し、初年次教育の集大成である freshman<sup>1</sup> thesis では日米手話を比較分析する、コミュニケーション漬けの学生生活が始まりました。

ところがしばらくすると授業内容への疑念が生まれます。「場面Xにおいて日本人はA、米国人はBという反応をすることが多い」といった知見を次々と提示するだけの講義は単なる知識の切り売りにすぎないと感じました。「人と人の関わりがこれほど単純なはずはない。これをどうやって調べたのか、その裏にはどのような根拠があったのかが知りたい」と研究法や理論への興味が芽生えました。また、欧米の価値観に基づき日本社会のコミュニケーションを批判する一部教員の言動に反発し、知見の文化的普遍性を強く意識するようになりました。

さらに、異文化コミュニケーション研究を中心に据えたカリキュラム自体にも懸念を抱き始めました。コミュニケーション学の一応用領域かつ後発分野にすぎない異文化コミュニケーション学からではなく、その基盤を成す対人コミュニケーション学、ひいてはコミュニケーション学全般から学び始めるべきではないのかとの思いに駆られ、近代コミュニケーション学研究の中心地である米国で学びたいと願うようになりました。

授業内容に多少の不満があっても目を瞑り、「ICUでコミュニケーションを専攻しました！」とさえ言えば一流企業への就職が容易だったこの時代、心の中の根源的な問いに突き動かされ、あえて人より険しい道を選んだことは、その後の私の研究者としての歩みを象徴する出来事でした。

### 3. 「本家本元」で薫陶を受ける

国際ロータリー財団奨学生として、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校に留学したのは大学3年の時でした。同大学スピーチ・コミュニケーション（現コミュニケーション）学科は、米国コミュニケーション学会の評価で常に首位に選ばれるコミュニケーション学研究の本家本元であり、ここで私はコミュニケーション学研究者として本流の教育を受けることになります。対人コミュニケーション学領域で長年第一人者であり続けた Delia & Clark 夫妻に師事し、研究法や理論に関する科目を精力的に履修しました。

#### 3.1 コミュニケーション学「イリノイ学派」の真髄

続く春学期には、Clark 教授の個人指導のもと、卒業論文「帰属様式の日米比較（成功・失敗体験を、運・実力・努力のいずれかに帰属させる言動により、対人印象が日米でどのように異なるか）」のための調査に着手し、イリノイ学派の真髄である丁寧なデータ収集の手ほどきを受けました。それは社会構造主義に基づき、既存研究に散見される「アンケート回答内容＝事実」という短絡的な捉え方を否定するものでした。回答者の考えや実際の言動と質問紙上の回答に乖離があるのは当然であり、その乖離を最小限に抑えるには回答者に極力ストレスを与えぬことこそ肝要という観点から、用紙の色や厚みから改行・改ページに至るまで細心の注意を払うことを学びました。

コミュニケーション学にはさまざまな研究手法が存在しますが、その中のどれを採用するのかという判断に、研究者個人の来歴が与える影響は決して小さくないように思います。その意味において、イリノイ学派の社会構造主義的アプローチは、本音と建前という概念が存在する日本社会で育った私にとって非常に受け入れやすいもの

<sup>1</sup> 当時の呼称

のでした。

### 3.2 真理探究に対する姿勢

当時、Delia & Clark 夫妻の研究は、その知見の普遍性を検証する段階にあり、学科初の外国人留学生である私は、折に触れ「公理 X は日本においても通用するか」という質問を受けました。一切の忖度なく反例を示しても、お二人は機嫌を損ねるところか学術的興味を一層刺激される様子でした。反例こそ理論の精練に資すると歓迎する姿勢に、一流の研究者とは真理の探究に対しこれほどまでに謙虚なのかと深い感銘を受けました。

同時に、学部時代に私が反発した、異文化感受性の低い授業を展開した教員は、Delia & Clark 夫妻とは真逆の存在であったと気付かされました。コミュニケーション学の中の特定領域の教育しか受けておらず、広く深く学んだ経験がないために、既知の枠組みから少しでも外れる事象に遭遇すると機能不全に陥る、しかし自分の力不足が原因とは気付かず（あるいは気付かぬふりをして）何事も「日本人は非論理的だ」の一言で済ませようとしていたのでしょう。改めて、異文化コミュニケーション学という井戸から抜け出し、コミュニケーション学全般を学べる大海に飛び出したことは間違っていなかったという確信を得ることができました。

### 3.3 教員個人の資質と組織の成熟度

イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校は図書館情報学や計算機科学においても全米最高水準を誇る学術機関であり、最良の研究環境が用意されていました。教授陣も、卓越した能力をもつ研究者であると同時に優れた人格者であり、献身的な教育者でもありました。授業外で研究指導を受けても「この研究を着想したのはあなたであり、私は教員として当然の指導をしたまでするので共同執筆者に加える必要はない」と言われることが常でした。

このような寛容さは、教員個人の資質のみならず、コミュニケーション学科の組織としての成熟度に負う部分も大きかったように思います。教員の大半は研究者として既に揺るぎない地位にあり、自らの研究業績を伸ばすことよりも後進の育成に注力する段階にありました。また彼らは、研究上のどのような要望にも即応できる能力と余裕を持ち合わせていました。したがって私達大学院生は、指導教員自身の研究課題に縛られることなく興味の赴くまま自由にテーマを選び、授業を取ったことすらない教員からも手厚い指導を受け、その成果を単著として発表していました。特に私は7年間にわたり Clark 教授の唯一の大学院生として、テーラメードの研究指導を享受することができました。

一方、若手研究者が大半を占める教員組織では、彼ら自身も終身雇用権を得るため余裕がなく、複数の院生を効率的に指導するため屋根瓦方式の教育を行うことがあります。院生は指導教員の専門領域の範囲内でしか研究課題を選ばず、最初はデータ入力ばかりさせられるも共同執筆者に加えられることすらない、単なるタダ働きだという嘆きを、他大学の日本人留学生から聞くことができました。

## 4. コミュニケーション学研究のメッカに戻り、武者修行を始める

大学を卒業するとほどなくしてイリノイ大学に戻り、修士課程に進学しました。研究者の卵としてようやく本流を歩み始めるかと思いきや、ここでもまた私は傍流に自分を追い込みます。対人コミュニケーション学研究のメッカにありながら、当時まだ傍流であった異文化コミュニケーション学を自らの専門にしたいと考えたのです。コミュニケーション学の起源から広く深く学ぶため、理論系科目ではギリシャ・ローマ時代の文献から読み進めるイリノイ大学の正統的カリキュラムにおいては、大理論(ground theories)の構築につながる領域の研究が主流であり、異文化や非言語といった状況別の、大理論に直結しにくい領域の研究は際物扱いされていました。当然ながら異文化研究を指導できる教員はおらず、引き続き Delia & Clark 夫妻の指導の下、対人コミュニケーション学研究の手法を学びながら、米国で重要とされるコミュニケーション事象の日米比較を行う形で異文化研究を続けることになりました。このような比較研究は *cross-cultural communication studies* と呼ばれています。

一方、当時の異文化コミュニケーション学界においては、文化的背景の異なる人々が直接交流する場面で起きる事象を分析する *intercultural communication studies* が時流に乗り始めていました。異文化コミュニケーション学の研究者としての発信力を維持するためには、こちらの重要概念や最新の知見に触れる必要がありますが、イリノイ大学ではそのような情報は得られません。そこで私は、大学院の正規授業ではケケロの書簡集を読みコミュニケーション学の起源への理解を深めるという正統的教育を受けつつ、自分の時間を使って異文化コミュニケーション学研究を行い、その成果を関連学会で発表することにより他大学の教員からフィードバックを得る「道場荒らし」のような研究生活を送っていました。

### 4.1 とどのつまりは意気地なし

異文化研究の指導者がいる大学院に移籍すれば、この途方もない遠回りを免れていたことでしょう。ではなぜ私はそこまでイリノイ大学にこだわり続けたのでしょうか。当時は「異文化コミュニケーション学には、まだ対人コミュニケーション学のように確立された理論や研究法がなく、そのような『定かではない』領域で研究者と

して養成されることに不安を覚える」と説明していましたが、今でもその考えは間違っていなかったと思います。また、すでに家族同然の存在となっていた教職員や同級生達との絆やイリノイ大学の肩書を手放し、新興大学院の院生を名乗ることが自己概念上受け入れられなかったことも事実です。厳しい見方をすれば、どれほど御託を並べようとも、実際には本流という安全な場であるイリノイ大学に身を置いたままで、傍流である異文化コミュニケーション学のテーマに手を出す「いいとこ取り」をしようとしていただけなのかも知れません。

#### 4.2 時期尚早な論文投稿によるトラウマ

一年後博士課程に進学すると、その後の研究者人生に大きな影響を与える出来事が起こります。まず、人生初の論文投稿が大失敗に終わります。「道場荒らし」を始めた頃の私はまさに無敵で、月に数回におよぶ全米各地での学会発表をものともせずにごこなしていました。当時のイリノイ大学コミュニケーション学科には、このような自主的な学会発表を奨励する一方、論文投稿は非常に慎重に行わせるという文化がありました。その背景には、どの大学院で学んだかということの方が筆頭原著論文の数より重視された当時の就職事情だけでなく、不用意な投稿により未熟な院生が傷つくことのないようにという配慮があったように思います。

ところがその頃、他大学の屋根瓦方式で育った若手教員が着任し、終身雇用権欲しさに、自分が共著者となれそうな内容の院生のレポートを見つくと、十分な指導もせず一流誌に投稿させることを始めます。これに唆され、論文投稿という名の禁断の果実に手を出した私と同級生達は、非常に厳しい査読意見に震え上がり、今に至る心の傷を負うことになりました。

#### 4.3 博士論文のテーマは非重要概念？

その後はまた順調な研究生生活に戻り、博士論文のテーマとして「謝り方の日米比較」を選びます。ここに至るまでが再び本流と傍流のせめぎ合いで、「説得や印象操作といった重要概念ではなく、そのような取るに足りないテーマを研究することは無駄ではないか」という議論が巻き起こります。イリノイ学派では、博士論文に着手する前に、同じ主題を量的・質的双方の手法を用いて分析した論考を提出することが求められていましたので、私は日米のマナー本の内容分析を行い、米国では研究テーマとして省みられることのない謝罪という行為が、日本では非常に重要であること、米国で重要とされる事象のみ研究してはコミュニケーション学の将来的な発展は期待できないことを訴え、教授陣の説得に成功しました。

#### 4.4 ハラスメントと研究倫理

晴れてテーマが認められると、毎夏イリノイ大学の語学研修に参加している、日本のある大学の学生グループの協力を得て予備調査を行いました。ところがその中に「引率者の教授から昨晚ハラスメントを受けた」という回答を見つけます。学内の研究倫理機関から「守秘義務を破ってでも被害者を早急に保護することが公益に適う」とのお墨付きを得て、その学生を助けると同時に日本の大学にも報告を行いました。翌年なんとまた同じ人物が引率者として派遣されてきたことに失望しつつも、このような研究倫理上の重大事象への対応を、まだ教授陣の支援が得られる大学院生のうちに経験できたことは不幸中の幸いだったと考えることにしました。

ところが本調査に進んだ段階で、今度は私自身がハラスメント案件に巻き込まれます。日本でのデータ収集先に窮していた私を見かねたイリノイ大学の教授から「学会で名刺交換したことがある日本人」を紹介されたのですが、これが実にとんでもない輩でした。彼の企みは幸い未遂に終わりますが、私がそれを告発したことに逆上したこの研究者により400人分のデータが無に帰すこととなりました。研究者としての将来を考え黙っていたら、こんな目に遭わずに済んだのでしょうか。でも私はあの時声を上げてよかったと思っています。

半年遅れで博士論文が完成する頃、私は第二の母と慕う Clark 教授に「コミュニケーション学はこんなにも広くて深い学問分野なのに、私はその一部も理解できていないので、まだ卒業すべきではないかも知れない」と真顔で打ち明けます。すると彼女は、そのような境地に至ったことこそ卒業の時を迎えた証なのだと思われ、おめでとう、教授」と右手を差し出しました。対等な研究者として認めることを意味する愛情深い握手と共に、私はイリノイ大学から送り出されました。

### 5. 「曲がったことが許せない」ばかりにことごとく回り道をするはめになる

ハラスメント案件に限らず、自分より立場が上の相手の行動に学術的または倫理的違和感を覚えると、損得省みず声を上げる向こう見ずな傾向が私にはあります。帰国後日本で研究活動を始めると、その才能(?)が一気に開花します。その裏には、本流を知った上で感じる傍流への苛立ちがあったのではないかと思います。

#### 5.1 結果の解釈や研究倫理に対する疑問

コミュニケーション学研究が英語教育と不可分であった歴史的経緯から、1990年代後半の日本のコミュニケーション学界には、英語・英文学科出身で、コミュニケーション学教育を受けたのは大学院入学後かつ特定領域限定であるという経歴の研究者が数多くいました。これに対し、私には大学入学時からコミュニケーション学に関

する本流の教育を受けてきたという自負があり、傍流にすぎない彼らの研究がことごとく気に障りました。

ある時「美しい女性ほど周囲から距離を取りたがることを証明した」という学会発表に遭遇し、美を数値化した手法を尋ねると「対象者全員に『あなたってどのくらい美人?』と聞きました」という答えが返ってきました。社会構造主義とは到底相容れないこの回答に「それならその結果は『美しい女性ほど』ではなく『第三者に対し自分の美人度が高いと言う女性ほど』と解釈すべきではないか」と反論し、このタレント教授を完全に敵に回すことになりました。

別の学会では「介護職による言葉の暴力を告発するため、方言調査を装い学生に施設内の隠し撮りをさせた」という発表がありました。この慶應の教授に対し、「あなたの熱意は尊敬するが、その手法は間違っており、目的により正当化されうるものでは到底あり得ない」と私が言い放つと、会場には「この若造、潰されるぞ」という緊張感が走り、一気に静まりかえりました。

## 5.2 「逆踏み絵」への抵抗と「拾う仏」の登場

これらの出来事と前後する時期に、国際基督教大学で教員が公募されました。在学中キリスト教と真剣に対峙したものの、三位一体の教義が解せずに入信を思いとどまった私は、当時信者であることを終身雇用条件としていた母校に戻ることは諦めていました。ところが米国で見つけたその広告には宗教要件の記載がなかったことから、撤廃されたものと応募し最終選考まで進んだ時点で、実はこの要件がまだ存在していることを知らされます。選考委員会からは「同級生に一人くらい牧師がいるだろう。所属教会としての推薦状を頼めないか」という打診がありました。

もし「信者でないから採用できない」とだけ言われたなら、卒業生でありながら要件確認を怠った自分こそ申し訳なかったと詫びて終わっていたと思います。しかし虚偽の推薦状を依頼することを示唆されるとは全く想定外でした。「これではまるで『逆踏み絵』ではありませんか」と、また余計な捨て台詞を吐いて無籍浪人となり、母校には戻らず他大学での非常勤職を選びました。

捨てる神あれば拾う神ありということわざの通り、神に捨てられた私にも拾う仏が現れます。翌年、奇しくも大学の先輩の紹介によりフェリス女学院大学に専任職を得ました。ところが私の指導する学生の卒業論文副査となった文学者の同僚に「この仮説とは何ですか。『支持されなかった』ということはウソだったということですよね?あなたは学生の卒論にウソを書かせるのですか」と詰め寄られ、この文学科の傍流として実証研究を行うことには大きな困難が伴うと痛感しました。

また、それまで自大学とイリノイ大学の学生から得たデータに基づき異文化研究を行っていた私は、米国の研究倫理審査手順が厳格化され、自大学での受審が義務化されたことに伴い、研究倫理委員会のない大学で研究を続けることに限界を感じ始めました。

そこに私の研究履歴上の最大の救世主、件の老人ホームでの研究を行った慶應の教授が現れます。彼女は数年前私が研究倫理上の批判をしたことを承知の上で、その後先を考えない正義感が公的金融管理に役立つかも知れないと、学会事務局の経理担当に登用しました。それまで学会を私物化していた理事達の不正を正した結果、二人してこの学会に疎まれることになるのですが、これを契機として新設予定の学部には誘われます。私はその学部に研究倫理委員会が設置されることを条件として、この人事に応募し採用されました。着任後しばらくは異文化研究を続けていましたが、39歳で受けた教授昇格審査において医療関連の研究業績を増やすことを推奨され、医療コミュニケーション学への完全な転向を果たします。

## 6. 現在と今後に向けて

その後現在に至るまで、看護医療学部の「幸せな傍流」として20年近くの研究生生活を送ってきましたが、謝罪について研究していた頃に比べ、思うような業績を残せてはいないように思います。屋根瓦方式の教育を受けておけばよかったというのも、研究歴半ばでの宗旨替えが予想外に堪えたというのも、若手教授として新設学部の運営に携わったために研究時間が確保できなかったというのも、すべては言い訳にすぎず、結局はこれが研究者としての私の実力なのだと思います。

本流の教育を受けたばかりに一流の研究とは何かを知ってしまい、その基準に満たない研究を自分の名のもとに公表することを躊躇う妙な自尊心が、捨て身の論文投稿の邪魔をします。イリノイ大卒という肩書きに見合う学術的貢献を行い、故郷ならぬ母校に錦を飾りたいのに、一向に果たせずにいる自分を不甲斐なく思います。

後悔だらけの研究履歴ではありますが、良心の呵責だけは全くないことが唯一の救いです。慶應義塾大学看護医療学部研究倫理委員会において通算3期目の委員長職にある私は、コミュニケーション学の博士号のみで医療系学部の研究倫理委員長となった国内初の事例ではないかと思えます。これまでの率直な物言いがこのような形

で昇華するとは想像すらしていませんでした。

近年の私は、正義感から檄を飛ばすことがめっきり減りました。医療コミュニケーション学領域における自分は闘入者であり、所詮は傍流にすぎないという自覚により、本流の意見に耳を傾けるようになりました。また組織内での立場が高くなるにつれ、自分の正義だけが正義ではないことや、正義を振りかざすと自分より立場の低い人々が不利益を被る場合があることを知り、反駁を思いとどまる場面が増えました。これまでは相手や組織の将来を思って（たとえそれが独善であるにせよ）声を上げてきましたが、今では「好きなようにすればいい。その結果何が起ころうとも、私が憎まれ役を買ってまで警告するには値しない」と考えるようになりました。

これが大学入学以来約 40 年にわたる私の研究履歴の嘘偽りない述懐です。自らの研究者としての軌跡を辿る機会を得たことに感謝し、本稿を終わりにいたします。